

「Beauty うつくしいもの」



2009（平成21）年2月3日鑑賞<角川映画試写室>

監督：後藤俊夫
 小椋半次（村歌舞伎の看板役者）／片岡孝太郎
 桂木雪夫（村歌舞伎の花形役者）／片岡愛之助
 東浦歌子（半次と雪夫の幼なじみ）／麻生久美子
 木下政男／嘉島典俊
 佐伯剛三郎／真島秀和
 桂木久子（雪夫の妹）／大西麻恵
 小椋半造（半次の祖父）／井川比佐志
 半次（少年時代）／高橋平
 雪夫（少年時代）／大島空良
 歌子（少女時代）／兼尾瑞穂
 中村（芝居小屋の座長）／串田和美
 諸戸文雄（ラーゲリの通訳）／二階堂智
 東浦鶴太郎夫（歌子の父）／赤塚真人
 村長／北村和夫
 2007年・日本映画・109分
 配給／ジョリー・ロジャー

<『さらば、わが愛／霸王別姫』の信州版は？ その1—幼少時代は？>

京劇をテーマとし、段小楼（張豊毅／チャン・フォンイー）、蝶衣（張國榮／レスリー・チャン）、菊仙（鞏俐／コン・リー）の3人を主人公とした陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『さらば、わが愛／霸王別姫』（93年）は名作中の名作（『シネマルーム5』107頁参照）だが、村歌舞伎をテーマとした『Beauty うつくしいもの』はいわばその信州版？さて小粒ながら（？）、『さらば、わが愛／霸王別姫』の信州版の展開はいかに・・・？以下の4点に注目したい。

『さらば、わが愛／霸王別姫』でも幼少時代の段小楼と蝶衣がかなり詳しく描かれていたが、菊仙はその時代には無関係。つまり菊仙は、段小楼と蝶衣が大人になってから登場するという構成だった。しかし『Beauty うつくしいもの』では、幼少時代の小椋半次（高橋平）、桂木雪夫（大島空良）、東浦歌子（兼尾瑞穂）の3人は、信州の伊那路村での幼なじみ。もともと、もともと雪夫と歌子が村歌舞伎のプロで、木こりの半造（井川比佐志）の孫である半次は、雪夫の舞に魅せられて村歌舞伎入りをした少年だが、なぜか半次が映画の主人公になっていくことに。

<『さらば、わが愛／霸王別姫』の信州版は？ その2—三角関係は？>

『さらば、わが愛／霸王別姫』では、段小楼と菊仙の2人が男女の仲を深め結婚する中、女形として段小楼と舞台を共にしていた蝶衣が微妙な立場になっていったが、さて『Beauty うつくしいもの』では？

もともと雪夫と歌子が好き合っていたことは明らか。そこに雪夫の後押しを受けて（？）半次が割り込んでいったため、歌子が大きな影響を受けたわけだが、さてそこに三角関係的な問題発生の可能性は・・・？

<『さらば、わが愛／霸王別姫』の信州版は？ その3—時代対比は？>

時代的には、『さらば、わが愛／霸王別姫』が描く段小楼と蝶衣の幼少時代は1920年代後半であるのに対し、『Beauty うつくしいもの』で3人の子供時代が描かれるのは昭和10（1935）年だから、約10年遅い。

他方、『さらば、わが愛／霸王別姫』でも1930年代後半からの日中戦争の開始に伴って3人の運命が大きく変化していったが、それは『Beauty うつくしいもの』における青年期の半次（片岡孝太郎）、雪夫（片岡愛之助）、歌子（麻生久美子）も同じ。いや、信州に残った歌子はともかく、敗戦間近の1944（昭和19）年に19歳で召集され、1945年の敗戦後シベリア抑留を余儀なくされた半次と雪夫の運命は、段小楼や蝶衣よりずっと過酷だった。このように比べてみると、戦争によって奪われたものは、段小楼や蝶衣より半次と雪夫の方がずっと大・・・？

<『さらば、わが愛／霸王別姫』の信州版は？ その4—半次と雪夫のウエイトは？>

『さらば、わが愛／霸王別姫』ではレスリー・チャンの女形役へのハマリが大きな話題を呼んだが、ストーリー全体を通して段小楼と蝶衣のウエイトは1対1だった。しかし、いとこ同士だという上方歌舞伎の名門松嶋屋のプリンス片岡孝太郎と片岡愛之助の2枚看板をスクリーン上に登場させた『Beauty うつくしいもの』では、半次と雪夫のウエイトはほぼ2対1。しかも『Beauty うつくしいもの』では、70代になった半次が引退公演で雪夫の衣装を着て『天竜恋飛沫』を演ずるシーンが最後のクライマックスとして用意されているから、彼我的扱いの差はさらに大きくなる。

したがって、2枚看板という言葉を鵜呑みにせず、その扱いの差はしっかりあなた自身の目で。

<ミュージカル『異国の丘』を彷彿>

劇団四季の「昭和3部作」である『李香蘭』『異国の丘』『南十字星』は、特に若い世代に鑑賞してもらいたい名作中の名作。その『異国の丘』では、シベリア抑留生活の情景が詳しく描かれ、寒さと飢えと病気の中で主人公である九重秀隆が死んでいくシーンが涙を誘った。また、故郷に残る家族に手紙を残したいが、手紙を書くことはスパイ行為として厳禁されているため、遺言を口述し、生き残る者がそれを暗記する姿が感動的に描かれていた。

この映画中盤は、それまでの美しい伊那路村の風景から一転し、酷寒の地シベリアに抑留された半次と雪夫の苦難の姿が描かれる。時代は1947年。ある日、厳しい強制作業の中雪夫は視力が失われつつあることに愕然となったが、これは逃避行を続けていたある日、上官から命じられて足手まといになる子供たちに対して手榴弾を投げた時の傷が悪化したもの。そんな中で雪夫は病に倒れ、その遺言を受け止めたのが半次。病が悪化した雪夫は、強制隔離された後死亡したとの噂が流れたが・・・。

この映画におけるそんなシベリア抑留の描写は、『異国の丘』を彷彿・・・。

<『六千両』を演じる役者は誰？>

この映画は3部構成になっている。つまり、第1部は19歳になって召集されるまでの3人の青春時代、第2部はシベリア抑留の過酷な時代、第3部は半次だけが生きて故郷の伊那路村に戻り、歌子と共に再び村歌舞伎を復活させていく時代だ。

木こりの息子だった半次も復員後は立派な材木商となり、戦後復興とともに村歌舞伎を順調に復興させてきたのはめでたい限り。そんな中、半次の耳に入ってきたのが、伊那路村だけに伝わる芝居『六千両』を遠い村で演じている役者がいるということ。そりゃ一体誰？『六千両』は自らの目をえぐって、源頼朝への過去の恨みを捨てる悪七兵衛景清を主人公としたものだが、それを演じるのはひょっとして盲目となった雪夫？雪夫は生きていたの？そんなミステリーじみた展開を楽しみつつ、『六千両』のストーリーの哀しい物語を味わいたい。

<歌舞伎の勉強に最適！>

私は歌舞伎に全然興味が無いが、それでもこの映画を観ていると『六千両』はもちろん、半次、雪夫、歌子の3人が子供時代、大人時代を含めて何度も役を変えて演ずる『神霊矢口渡』や、70代になった半次が引退公演で演ずる『天竜恋飛沫』などのストーリーが十分理解できる。ちなみに、プレスシートを読むと、日本各地で継承された村歌舞伎が全国200カ所近くにあるらしいから、興味のある方は勉強を重ねてみては・・・。

<橋幸夫と『お嬢吉三』>

私の中学生時代の歌謡曲の世界における御三家は、橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦の3人。舟木一夫と西郷輝彦は曲の路線がほぼ一定していたが、橋幸夫は幅が広く、①『江利子』（62年）、『白い制服』（63年）、『霧氷』（66年）等のムード歌謡、②『いつでも夢を』（62年）に始まる吉永小百合とのデュエット路線や青春歌謡、③『恋をするなら』（64年）に始まり『恋のメキシカン・ロック』（67年）で終わるエレキ歌謡、④デビュー曲『潮来笠』（60年）のラインを継ぐ股旅路線等があった。

そんな橋幸夫が歌舞伎の演目『三人吉三』の1人であるお嬢吉三を歌った曲が、『お嬢吉三』（63年）。中学時代の私はその意味を全くわからないままその曲を歌っていたが、この映画のプレスシートを読んでからはじめてわかったのが、義兄弟の杯を交わしたお嬢吉三とお坊吉三和尚吉三の3人が思わぬ因果話に発展していく物語が『三人吉三』だということ。

<『三人吉三』を演ずる子どもたちは？>

用意された衣装を使わず、あえて雪夫の昔の衣装を着て臨んだ半次の引退公演は、あっという間にハプニングの中で大成功を収めた。そして、今静かに余生を送る半次の前で『三人吉三』の稽古をしているのは村の若い子供たち。そんな姿を見れば、ついセリフ指導、演技指導をしたくなるものだが、さて半次は？

私は後藤俊夫監督作品をこの映画ではじめて観たが、彼は『マタギ』（81年）、『イタズ』（87年）、『オーロラの下で』（90年）などで自然と共生する人間たちを描き続けてきた監督らしい。そんな後藤俊夫監督が『Beauty』という英語のタイトルをつけて臨んだのがこの異色作だが、一見の価値あり！後藤俊夫監督が『三人吉三』を演ずる子供たちに託す思いをしっかりと理解し、受け止めたものだ。